

諮 問 物 件 調 書

種 別	無形民俗文化財
名 称 ・ 員 数	たしろねんぶつけんばい 田代念佛剣舞
所有者（保持者・団体） の住所・氏名（名称）	岩手県宮古市区界2—310 田代念佛剣舞保存会 会長 黒澤 良一 <small>くろさわ りょういち</small>
文化財の所在場所	岩手県宮古市区界（旧川井村門馬地区 <small>かどま</small> ）
指 定 理 由	<p>田代念佛剣舞は、宮古市区界（旧川井村）に所在する民俗芸能で、主に盆供養として毎年8月15日に行われている。</p> <p>成立時期については、文化年間（1804-1817）に田代村<small>さりとせに（え）もん</small>の去石仙仁門が仙台七木田（七北田か）の酒屋に出稼ぎに行っていた最中に習い覚えて巻物を授与されたとの伝承がある。戦時中でも盆供養だけは欠かさずことなく行っていて、さらに、戦後早くから盛岡市で発表会を行うなど精力的に活動を行い、現在に至っている。過疎化が著しい地域ではあるが、地元の小中高生を中心に毎週継続して練習を行いその継承に努めているほか、保存会が地域行事を主催するなど、地域の核となって活躍している。</p> <p>芸態としては、太鼓、笛、鉦<small>かね</small>による<small>はやし</small>囃子と扇などの道具を持った踊り手により構成され、芸能の内容は、回向（供養）を目的とする儀礼的な「御墓踊<small>みほかおどり</small>」と、円陣となって踊る「剣舞」とに大別される。</p> <p>御墓踊は、渋草沢地区の田代念佛剣舞供養塔（昭和51年10月建立）前<small>さりとせ</small>や去石地区の剣舞創始者の墓所で行われるほか、初盆の死者の墓前で門打ちとして欠かさず行われている。門打ちの後には、保存会員による「巻物開き」が行われる。このように、昔からの一連の儀式・儀礼を継続・保存しているものである。</p> <p>剣舞は、御墓踊の後に行われるほか、主に巻物開きの後に地区の集会所で披露している。独特の太鼓の拍子、扇や長刀をまわしながらの踊りなど、道具の使い方にも高い技量が認められるほか、かつて10演目存在した中で、現在においても7演目を継承している。</p> <p>同系統の念佛剣舞は、宮古、盛岡の各方面に成立しているが、その中において、宮古市岡村（現：箱石岡村）や盛岡市銭掛（現：新庄字銭掛）などが田代からの伝承とされるほか、盛岡の大ヶ生高館<small>おおがゆうたかだて</small>剣舞が、長期にわたる休止期から再開する際に田代から教わったとするなど、芸能を通しての周辺地域との多くの関わりがなされている。</p> <p>これらのことから、田代念佛剣舞は、古式の儀礼や芸能の形態、技能を現在に伝えていること、周辺地域における同系統の芸能との関係性を考える上で重要であること、さらには、今後も継続的に活動を行い、地域の中核としての役割が期待されることから、岩手県指定無形民俗文化財として指定するのにふさわしいものと考えられる。</p>

	<p>【岩手県指定文化財指定基準】</p> <p>第4 無形民俗文化財指定基準</p> <p>2 民俗芸能</p> <p>(2) 芸能の変遷の過程を示すもの</p> <p>(3) 地域的特色を示すもの</p> <p>【参考：宮古市指定無形民俗文化財（旧川井村指定）（指定年月日 平成元年12月12日）】</p>
--	---

指定文化財調査報告書

調査員 中嶋奈津子
 調査日 令和2年8月15日
 報告日 令和2年8月17日

1 所有者（保持者・団体）の 住所・氏名（名称）	岩手県宮古市区界2-310 <small>たしろねんぶつけんぱいほぞんかい</small> 田代念佛剣舞保存会 会長 <small>くろさわりょういち</small> 黒澤良一
2 文化財の所在場所	宮古市区界(旧川井村門馬地区)
3 種 別	無形民俗文化財(民俗芸能)
4 名 称	田代念佛剣舞
5 員 数	
6 品質・形状	
7 寸法・重量	
8 作者（保存会）	田代念佛剣舞保存会
9 時代又は年代	口伝では文化年間(1804-1817)
10 画 讃 奥 書 銘文等	・巻物「剣舞阿須羅秘伝法則」年代不詳 田代念佛剣舞保存会所蔵 ・歌書き(無題)、年代不詳(明治カ) 黒澤良一(保存会長)所蔵
11 伝来（由来・伝承）	文化年間(1804-1817)に田代村の去石仙仁門 <small>さきいしせんに(え)もん</small> が仙台七木田(七北田カ)の酒屋に出稼ぎに行っていた最中に習い覚えて巻物を授与されたことが伝えられる。 この剣舞は 1889(明治 22)年に岡村(現:宮古市箱石)に伝授され、さらに大正時代には岡村から江繫の大畑(現:宮古市江繫)に伝授された。昭和初期まで平津戸でも同じ剣舞が踊られていた。 加えて 1894(明治 27)年には銭掛(現:盛岡市浅岸)にも伝授されている。
12 その他	【経過・芸能の伝承法】 戦時中も盆の供養だけは行ったと言われ、戦後3年で盛岡市の発表会に出演している。以来休止・中断することなく伝承活動が継続されている。 昔は長男だけが踊ることができたが、昭和 50 年頃から地域の子供は誰でも踊っていいことになった。 地域の子供たちは、小学生になると6月からお盆まで週2回のペースで練習に参加する。11 月の川井郷土芸能祭など出演の機会があれば、継続して水曜と土曜に練習をしている。 保存会の会員は、小学生4名、中学生1名、高校生2名、成人13名、合計20名(令和2年4月1日)で、黒澤良一会長を中心に活動している。 ・昭和 23 年 盛岡市で発表会(会名称は不明) ・昭和 26 年 第6回岩手県民俗芸能祭 ・昭和47年 田代念佛剣舞保存会発足

- ・昭和60年 田代剣舞子供組発足
- ・昭和61年 剣舞後援会発足
- ・平成14年度岩手県青少年民俗芸能フェスティバル

【衣装】

- ・囃子

太鼓と鉦・笛は、妻折笠をかぶり鉢巻きをする。身頃が麻(現在はメッシュ)で袖柄の襦袢に浴衣を着て右肩を脱ぎ垂れにする。浴衣には袖口に赤い約10cm幅の縁がついている。紺縞の袴を着て、紺脚絆に黒足袋、草履を履く。左肩から右袖に赤・青の襷をかけ、赤い帯に赤・黄・緑のしごきを両腰に垂らす。手首に鈴を2個つけた腕ぬきをつける。

太鼓は白いしごきを太鼓上端に結び、右肩から袈裟懸けに左下端で結ぶ。鉦は、赤いしごきを付けて、首にかける。笛は、袴を履かずに太鼓と同様の着付けである。

- ・踊り手

踊り手は、演目によって花笠、鳥兜をかぶるか鉢巻きをする。身頃が麻(現在はメッシュ)の袖柄襦袢に浴衣の両袖を脱ぎ垂れにする。赤と青のしごきで、上が青、下を赤にして両襷をかける。短め(膝下)の紺縞袴に紺の脚絆、黒足袋をつけ草履を履く。黄色のしごきを帯にして、赤・着・緑のしごきを左右の腰に垂らす。手首に鈴を2個つけた腕ぬきをつける。また腰背部には、シカをつける。シカは、中央に「丸に四つ目菱」紋(閉伊氏の家紋と言われる)があり、左右に蓮の花が図案化されている。

【道具】

- ・囃子は、太鼓、笛、鉦であるが、昔はササラもあったという。

唄は太夫(太鼓役が担う)がかけ、サン声は鉦がかける。

- ・踊り手は、扇、太刀、長刀、綾を演目によって持ち代える。

花笠は、円筒形で上底面に赤もしくは白の花がのっている。側面は緑・黄色・赤で横縞が1段ずつ付いている。白い花の花笠をかぶるのは、リョウ踊(礼踊)をする2人で、他の踊り手は赤い花の花笠をかぶる。

鳥兜は、天辺に鶏がつき、黒地に朱色で両側面に日輪を描く。兜の羽根は、早池峰系の神楽に似て大きく、印章体風に角字で「壽」を図案化して描き、朱色で縁取りをつけている。

- ・これらの道具は、今は太夫である保存会長宅で保管している。昔は踊手が手分けをして道具を管理した。

【芸態】

森口多里は『岩手の民俗芸能念仏踊篇』で、田代念仏剣舞を「仮面をつけない阿修羅踊系の脱垂念仏剣舞」に分類している。

ア 構成

囃子は太鼓2名、鉦1・2名・笛2名に、踊手8名がついて歩く。

墓所や初盆の家で死者を供養する御墓踊・回向を行ってから、剣舞を1・2演目踊る。剣舞は10演目(庭)あるが、現在はのうち7演目を伝承している(演目については後述)。

イ 芸能の詳細

回向(供養)を目的とする儀礼的な「御墓踊」と、円陣になって踊る「剣舞」に大別される。

① 「御墓踊」について

渋草沢地区の田代念佛剣舞供養塔(昭和51年10月建立)と「南無阿弥陀仏」碑(嘉永6年4月建立)の前で御墓(ミハカ)踊をする。

まずは、2列縦隊で太鼓・鉦・笛が2人ずつ「南無阿弥陀仏」碑の前に進み、水桶から柄杓で水を地面にかけて拝む。囃子がインヨナムアミダブツと唱えると、踊手がウケ声としてナムアミダブツ・ナムアミダブツと長く歌う。そして、花笠をかぶった踊手達が、囃子に合わせて扇をまわしながら踊り、全員が順に碑の前で柄杓に水をくみ、地面にかけて拝む。

次に、太鼓・鉦・笛が左右両脇に分かれて下がり、舞手が4人ずつ御墓踊を踊る。御墓踊では墓うたい(別紙1)をかける。2人一組で向かい合って入れ違いながら踊るが、この入れ違いの時に、座って後ろに控えていた踊手が交代で踊りに入る。御墓踊の後、全員が座って太夫(太鼓)が回向を唱え、最後には起立して一礼する。御墓踊、回向で10分程度。その後「城廻し」や「高館」など剣舞を踊って終了となる。

②「剣舞」について

剣舞は基本的に^{では なかおどり ひきは}出端・中踊・引端で構成され、^{ひとつにわ}3段で一庭となる。出端から中踊に、中踊から引端に移る区切りでは、踊手は片膝をついてしやがむ。

・ショデー

庭に踊りながら入る時に、出端でなくショデーを踊る。刀を持つ「庭ならし」で庭に入る場合は扇を持ってショデーで入る。長刀を持つ演目、高館と七つ物は、ショデーと出端が同じ踊り。刀を持って庭に入ることはない。

・リョウ踊(礼踊)

引端の後に続けて踊るもの。円で踊っていた陣形から移動して、踊り手の先太夫と後太夫だけが中央または前に出て踊る。太鼓・笛・鉦・踊り手6人・鉦・笛・太鼓の順に一直線になり、白い花笠をつける踊手2人が踊った後、一礼して終わる。リョウ踊があるのは、扇か長刀を持つ演目で、城まわし・高館・二十七で庭踊りを終わる時にリョウ踊を踊る。

【剣舞の演目】

1. 庭ならし: 鉢巻をしめ、太刀を持って踊る。引端は、右手に刀、左手にたたみ扇を持つ。
2. 七つもの: 鳥兜をかぶり、長刀を持って踊る。
3. 城まわし: 花笠をかぶり、扇をもって踊る。礼踊がある。
出端には南無阿弥陀仏のサン声がかかる。
4. 高館: 鳥兜をかぶり、長刀を持って踊る。礼踊がある。
出端には念仏歌がかかる。
5. 二十三: 鉢巻をしめ、太刀で踊る。
6. 二十七: 鳥兜をかぶり、扇をもって踊る。
出端で南無阿弥陀仏のサンで踊る。
7. 五十五: 鳥兜をかぶり、両手に扇をもって踊る。
出端でサン声がかかる。
8. 七十三: 鉢巻をしめ、太刀を持って踊る。現在はできない。
出端にサン声がかかる。
9. 綾踊り: 花笠をかぶり、両手に綾をもって踊る。現在はできない。
出端にサン声がかかるが、節は他とちがう。
10. みたつくり
鳥兜をかぶり、長刀をもって踊るが、現在は伝承されていない。

【歌詞】

別紙1参照

【慣習と儀式】

盆の供養踊りの時は、必ず前述の「南無阿弥陀仏」碑の前で踊ってから

剣舞創始者(去石家・屋号「塚」)の墓所で、同様に御墓踊をして回向(供養)を唱える。

初盆の家で回向(供養)をする時は、家の縁側に位牌と写真を出して、その前で縁の下に水をかけ、御墓踊と回向を行ってから、剣舞を1・2演目踊る。

初盆の死者の墓で、回向するときは御墓踊と回向をして終了する。昔は、お盆は精進料理で、剣舞を頼んだ家も精進料理を出す習わしだった。現在は巻物開きの後、午後7時頃から地域公民館前の広場で念仏剣舞と盆踊り(さんさ踊り)を行う。

2 巻物開き

盆供養の門打ちが終わると、最後に宿(巻物を預かる家)の仏間において剣舞伝承者で、「巻物開き」の儀式を行う。この儀式は途絶えることなく継続されている。

保存会員が輪になって座り、宿元と太夫が巻物を開いて、右の人に送っていく。最後に宿元と太夫が巻物を箱に入れて、仏壇に納める。

この巻物は剣舞の担い手だけが見ることが出来るが、「見るというより拝むという気持ち」だという。現在でも、「巻物開き」の日以外に巻物を開けることはない。以前は「よその人が入っていれば巻物は開かない」習わしであった。

巻物を預かる宿が交代する時にも、剣舞を踊って巻物を移す儀式を行う。巻物が家から出る時には、庭で七つ物の出端を踊る。移転先の家に入る時には、庭で扇のショデーを踊って巻物が家に入る。

【行われる時季及び場所】

- ・毎年6月第3日曜日、兜神社(兜明神社)祭典で剣舞を奉納する。
- ・盆の供養が中心で、毎年8月 15 日午後から渋草沢で御墓踊をしてから始める。現在は、午後6時 30 分頃から地区の集会所で剣舞披露会を行っている。昔は披露会とは言わなかったが、剣舞を踊って披露する習わしだった。

以前は、依頼があれば 14 日から 16 日まで門打ちをした。昭和 40 年頃には、川井や岩泉、盛岡にも門打ちに行った。

【地域貢献・地域住民の関わり】

昭和 61 年に後援会が組織され、道具衣装を整える寄付を呼び掛けるなど地域をあげて伝承活動を支援している。昔から 15 日夜には剣舞を披露しており、さんさ踊りを皆で一緒に踊って地域住民が集うコミュニティの場になっている。近年は剣舞の御花を資金に「お楽しみ抽選会」を主催し、保存会が地域活動の核となって活躍している。

地元門馬小学校では継続的に伝承活動は行っていなかったが、学習発表会で保存会に参加している児童が剣舞を披露してきた。

【周辺の念仏剣舞との関連】

宮古方面のみならず、盛岡周辺地域にも念仏剣舞が伝播しており、藩政期の上田通代官所管内を中心に伝わった剣舞と言える。

銭掛(盛岡市新庄字銭掛)には、明治 27(1894)年に田代の念仏剣舞が伝承されている。銭掛の人々は山仕事や馬の放牧の関係などで、田代の地域との縁が深く、古い時代から嫁入りなどの婚姻関係を結ぶことも多かった。銭掛剣舞の来歴については、銭掛の有力者佐々木家(屋号:銭掛け ジスケの時代)に田代から嫁を迎えたことがきっかけであり、「田代の人が3か月、銭掛に泊まって念仏剣舞を教えた」と伝えられている。念仏剣舞の芸態は田代と同様であり、巻物開きの儀式も行われていた。

	<p>また、盛岡市の大ケ生高館劍舞<small>おおがゆうたかだて</small>（寛政11(1799)年に巻物成立）は、 <small>やながわ おだも</small>梁川・根田茂などに弟子を持つが、大ケ生劍舞が長期に渡る休止期の 後、昭和 23(1948)年に復興する際、同系統の田代念仏劍舞から教わ ったことが双方に伝えられている。銭掛同様、大ケ生地域の人々も区界 での放牧や山仕事の関係で、古い時代には田代地域との交流があっ た。田代と大ケ生の念仏劍舞が弱ったときに、互いに行き来して教えた ことが伝えられている。</p> <p>大ケ生の巻物には歴代庭元の屋号と氏名が記載され、その他の団 体の巻物でも大ケ生から伝わったことが判明する。しかし、田代念仏劍 舞の巻物には、年代その他明記されておらず、巻物の経路は不明とせ ざるを得ない。（巻物に描かれた十三仏図や梵字が最も整っていること から、田代の巻物が起源である可能性も考えうる）。</p> <p>【文書】</p> <p>1 巻物1巻 <small>もりこしゆきお</small> （田代念佛劍舞保存会所蔵、盛越幸雄氏保管：宮古市区界4-42） <small>けんぱいあしゅら ひでん(の)ほうそく</small> 「劍舞阿須羅秘伝法則」年代・作者不明 巻物は、昔は太夫が管理する習わしだった。 ・阿須羅踊の根源として、インド(コーサラ国)と中国の周王朝の王が十 三仏の霊夢によって万民を仏道へ導くために始めたという。日本では、 聖徳太子が四天王寺造立の時に十三仏・諸天善神のお告げにより、天 下泰平・五穀成就・父母成仏・衆生成仏のため舞い始めたものという。 十三仏の仏・菩薩を図像と梵字と共に「…尊の舞」などと記され、阿須羅 劍舞と名付け盂蘭盆の念仏踊によって父母成仏・衆生来仏・二世安楽 を妙術たるものとしている。</p> <p>2 歌書き(無題)1点 （田代念佛劍舞保存会所蔵、盛越幸雄氏保管：宮古市区界4-42） 年代・作者不明(明治期カ)、黒澤良一氏の曾祖父：要蔵が使ったもの 橋うたい、墓うたい、ざしき唄いの歌詞が書かれている。</p> <p>【文化財指定】 平成元年12月12日宮古市指定無形民俗文化財(旧川井村指定)</p>
<p>13 所見</p>	<p>1 死者供養儀礼の維持・保存 盆の死者供養として御墓踊・回向を「南無阿弥陀仏」碑と創始者の墓 所で欠かさず行っていること。また、門打ちをして初盆の墓所や家で死 者供養をして劍舞を踊り、巻物開きをするという昔からの一連の儀礼を 継続・保存している。</p> <p>2 演目の維持・保存 戦時中も盆の供養だけは行ったと言われ、戦後3年で盛岡市の発表 会に出演している。戦後3年で盛岡市の発表会に出演しており、以来休 止・中断することなく伝承活動が継続されている。</p> <p>独特の太鼓の拍子に始まり、扇や長刀をまわしながら踊るなど道具の 使い方に高い技量が要求される芸能と言える。劍舞の演目も7演目を 伝承し、古老の話によると、太鼓の拍子も昔のとおりの打ち方を継承し ていると言う。</p> <p>① 保持団体の継続性・将来性について 保存会員 20 名で、囃子6人は成人で構成される。踊手8人のうち半 数は小中学生が担っている。過疎化が著しい地域であることが懸念さ れるが、旧門馬村全体で伝承活動への理解と協力が得られており、小 学生になると週2回のペースで練習を重ねている。40 代の保存会長の 指導の下、小学生にも関わらず扇の使い方など難しい技芸も習得して おり、伝承活動は順調で将来の不安はない。</p>

② 森口および小形の研究報告によると、盛岡周辺の阿修羅踊系念仏剣舞として、田代、大ケ生、根田茂、築川、砂子沢、銭掛に同内容の巻物が伝わり、踊りも同じ系統の剣舞が伝承されている。

本調査により、大ケ生の巻物の成立が 1799(寛政 11)年であること、田代剣舞の巻物が起源である可能性が判明したことから、盛岡周辺の剣舞は遅くとも寛政年間(1789-1800 年)には踊られていたと推測される。

さらに飯坂真紀は、高館剣舞が伝わった盛岡周辺の6つの集落の交流を可能にしたのが、馬の守護として信仰を集めた兜明神社の祭であったと指摘している。また、大ケ生高館剣舞は中断と復活を繰り返し、明治期に途絶えた際はかつて伝授した田代念佛剣舞から習い返したと伝えられている。このことは、聞き取り調査からも判明している。

以上のことから、盛岡周辺の剣舞は少なくとも寛政年間まで遡ることができ、なかでも田代念佛剣舞は儀礼及び踊り・演目が休止されることなく維持され、明治以降は田代から踊りが伝授されるなど古式を残していると言える。

また、田代念佛剣舞が長期に存続したことから、その芸態や儀式の形式が閉伊川沿いの地域の高館念佛剣舞に影響を与えていることが考えられる。とくに大ケ生高館剣舞との関わりから、旧川井村周辺のみならず、盛岡市近郊の念佛剣舞の変遷を知るうえで、田代念佛剣舞は重要な存在である。加えて、花笠をかぶるのは田代剣舞のみで、今後の調査研究課題とはなるが、花笠は大念仏系の大笠の名残とも推察される。

よって、岩手県無形民俗文化財指定基準の(2)芸能の変遷の過程を示すもの、(3)地域的特色を示すものとして、その候補に提示する。

【参考文献】

川井村郷土誌編纂委員会『川井村郷土誌 下巻』1962年(川井村)

岩手県教育委員会『岩手の民俗芸能 念仏踊篇(附・山伏神楽補遺)』1965年

森口多里『岩手県民俗芸能誌』1971年 錦正社

門馬地区公民館『史誌かどま』1995年

小形信夫『念仏剣舞 発生・伝播・変容と資料』2002年 東日本ハウス文化振興事業団

川井村北上山地民俗資料館『川井の郷土芸能調査報告書』2009年 川井村教育委員会

飯坂真紀「高館剣舞、馬の古道を行く」『とりら 第7号』2013年 ふるさと岩手の芸能とくらし研究会

田代念佛劍舞 黒澤良一氏提供資料

【資料 1】

橋うたい

天竺ごうか川原の清の水

これ迄くだりて谷の白川

この橋いかなる大工おかけある

(飛驒カ) びだの匠(たくみ)のかけたそり橋

渡るとすれば、中たるみ

わたりて見れば浄土なるはし

墓うたい

七月ものゝあはれな月なれば

野にも山にも、あぶら火がたつ

七月ものゝあはれな月なれば

みはか 御墓あかすに灯を立てゝ

浄土となさるもの

此の道、如何なる亡者踏そめたもうじやかみ

行(いく)にも来(くる)にも一人なるもの

これこそ三途川の橋だもの

橋の高さは八万余丈

橋の広さは一丈五尺

罪の浅きのこえるには

右の一丈五尺に見えるもの

罪の深きの越(こえるカ)えには

糸よりほそく見るもの

泣くくそこにたおれ伏し

流れるせ(瀬)はあり、止まる瀬はなし

闇の世に泣かん鳥の声きけば

生れぬ先の親ぞ恋しき

ざしき唄い

扱(さ)ても目出度御座敷

千丁揃へた御座敷

びん(備後)ご表(高麗へりカ)に こうらいえり

ち(鎌子)ょうす盃 取そろい

吾等を上座になほされた

この御酒如何なる御酒と思召す

音に名高き加賀の菊酒

人が飲ばくすりさけ(薬酒)

鬼が飲ば毒となる

肴にとりては何と何

海のあ(鮑)は(鱒)び(鱈)に(鱈)たい(鱈)す(鱈)ゞ(鱈)き

三皿に盛りて飲や友達

只今御亭主(ごていしゅ)の御礼にはなにと何

紫こぼんに金を八包

只今お奥(かあ)さんの御礼にはなにと何

玉の手箱にせきの小刀

只今お酌(しゃく)の御れいにはなにと何

紫硯(しじゆん)にしかの巻筆

只今お酌の御礼にはなにと何

五尺のかずら(か)に白見のかゞみ

黄金(こがね)のさかずき 取上げて

白銀(しろがね)ち(鎌子)ょうす(鎌子)でつぎ廻る

此の御酒(ごしゆ)よそへもらすなつゆ程も

【資料 2】 黒澤良一氏提供資料

(ワープロ書き、現在使用)

墓うたい

七月ものゝあわれな月なれば

野にも、山にも、あぶら火がたつ

七月ものあわれな月なれば

御墓に御墓に灯を立てて

浄土となるもの

此の道、如何なる亡者踏そめた

行くにも来るにも一人なるもの

これこそ三途川の橋だもの

橋の高さは八万余丈

橋の広さは一尺五天

罪の浅きのこえるには

右の一丈五尺に見えるもの

罪の深きを越えるは

糸よりほそく見えるもの

泣く泣くそこにたおれ伏し

流れるせはあり、止まる瀬はなし

闇の世に泣かん鳥の声きけば

生まれぬ先の親ぞ慈しさ

公明へんしょう遍照 十万世界は念仏 衆生せつしゆふしや攝取不捨

出いずる処は照らすなり

しいやかの大願山高す 弥陀の大仏

海広し (即身) そくしん成仏うたがいなし

六字に向かう友あらば 声をはかりと迎うべし

むこうきくさは皆なびく

八十方は三千仏 道一切は諸菩薩

「 (空白) 」

なむ八方は諸小行 かいち阿弥陀仏

迷子三界上国十方空本なり

願がんにしくとく以此功德平等施一切同 おつ菩提心ほだいしん

往生安泰 国土こくんど 今日けふの志のお念仏

くうりまもつ
功力以て 浮ばせ給えや

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

ざしき唄い

さても目出度い御座敷

千丁揃えた御座敷

びんご表に ころらいえり

ちようす盃 取そろい

吾等を上座になおされた

この御酒如何なる御酒と

音に名高き加賀の思召す菊酒

人が飲めばくすりざけ

鬼が飲めば毒となる

肴となりては何と何

海のおわびにたいすずき

三皿に盛りて飲めや友達

只今御亭主の御礼になにと何

紫こぼんに、金を八包

只今お奥さんの御れいはなにをと何

玉の手箱にせきの小刀

只今お酌の御礼はなにと何

五尺のかずらに白見のかがみ

黄金のさかずき 取り上げて

白銀ちようすでつぎ廻る

此の御酒よそへもらすなつゆ程も

橋うたい

天竺ごうか川原の清の水

これ迄くだりて谷の白川

この橋いかなる大工おかけある

匠のかけたおり橋

渡るとすれば、中たるみ

わたりてみれば浄土なるはし

【資料3】『岩手の民俗芸能』より

サン声

さても見事なお庭かな

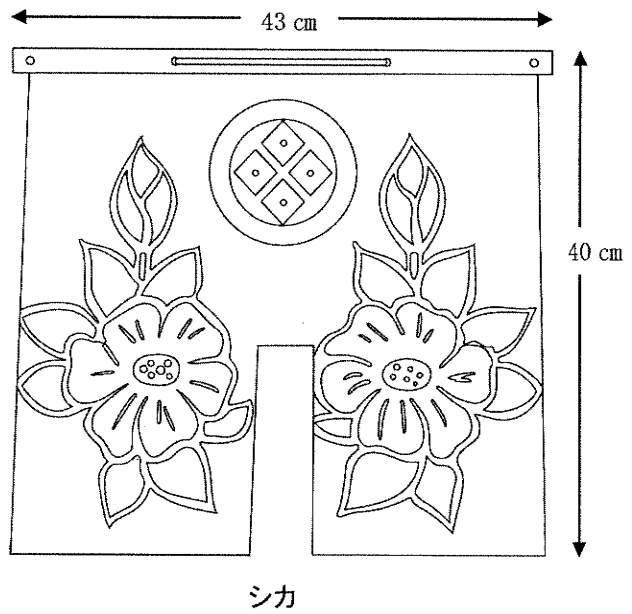
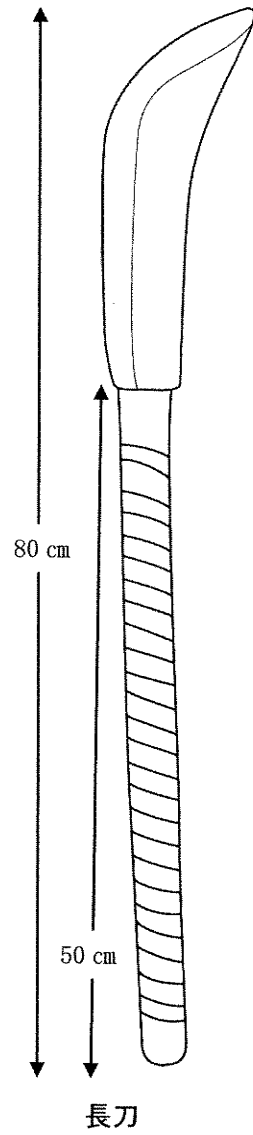
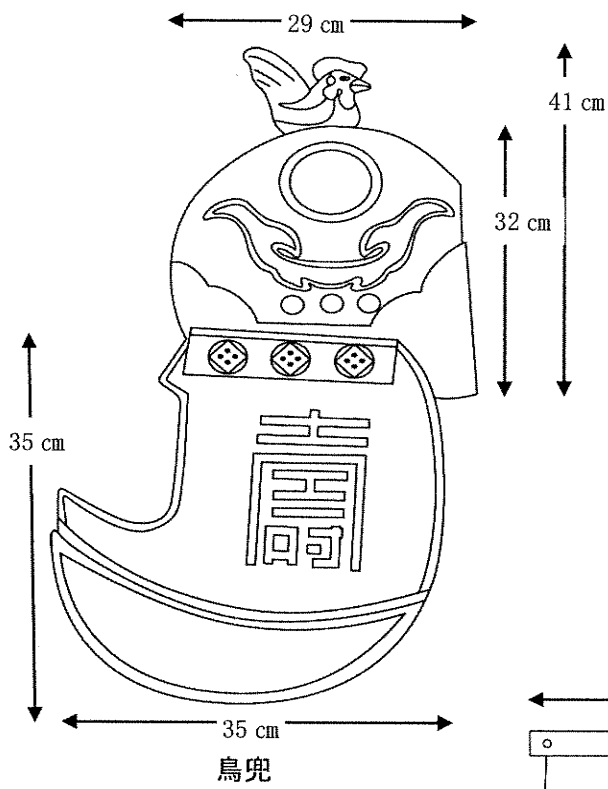
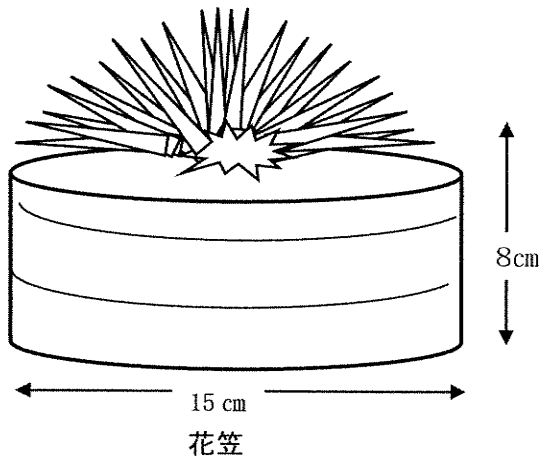
四方四角でマスガタで

後生願わば親ねがえ

親にましたる神はなし

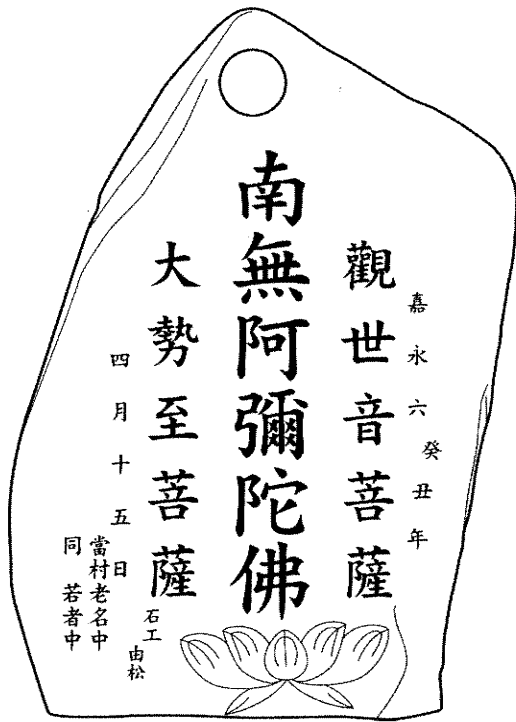
三国一の富士の山

田代念佛剣舞の道具



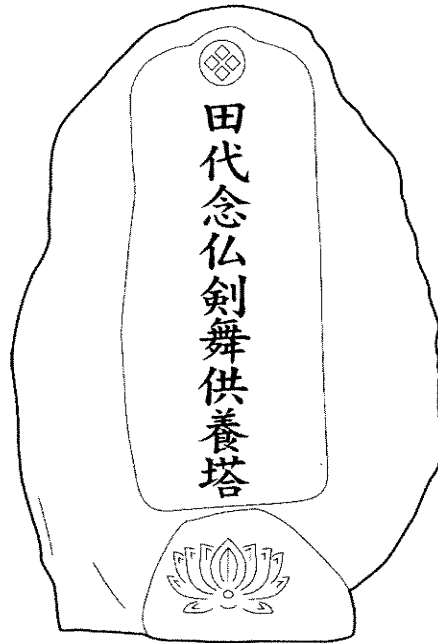
田代念佛剣舞で御墓踊をする石碑

①



田代・渋草沢
「南無阿彌陀仏」碑
1853(嘉永6)年4月15日
高さ162×幅104×奥行29cm

②



(背面)
昭和五十一年十月建之
小林東市謹書

田代・渋草沢
田代念佛剣舞供養塔
1976(昭和51)年10月
高さ122×幅81×奥行29cm



御墓踊



剣舞 たかだち
(高館)

【提供：田代念佛剣舞保存会】